

## 史料紹介と研究

## 『琉球沖繩本島取調書』所収「首里城ノ図」について

渡辺 美季

本稿は、神奈川県立日本常民文化研究所（以下、常民研）が所蔵する祭魚洞文庫のうち、『琉球沖繩本島取調書』所収の「首里城ノ図」【図1・2】を紹介し、若干の分析を試みるものである。

祭魚洞文庫は、一九三四（昭和九）年に故・渋谷敬三が開設した個人文庫で、現在は常民研のほか渋谷史料館・流通経済大学・国文学研究資料館などに分蔵されている。そのうち常民研の所蔵分に含まれる『琉球沖繩本島取調書』（祭魚洞一九〇七号）は、『琉球八重山嶋取調書 全』（同一〇〇七号）・『琉球八重山嶋取調書 付録』（同一九〇六号）などとともに、弘前出身の笹森儀助（一八四五～一九一五年）による一八九三（明治二六）年の奄美・沖繩調査に関わる資料群である。この調査は当時の内務大臣井上馨の依頼を契機に実施され、調査の目的の一つは「国土の資源開発と殖産興業の振興を図る」ことであった。「笹森（東）一九八三」。こうした背景もあり、行く先々で沖繩県庁をはじめとした現地役場が調査に協力し、儀助の要請に応じて資料を作成・提供している「得能二〇一四」。これらの収集資料を編綴したものが『琉球沖繩本島取調書』・『琉球八重山嶋取調書』であり——従って両取調書とも沖繩県の朱罫紙が多く用いられている「輝二〇〇七」——、儀助は帰郷後、これをもとに調査記録かつ出張復命書として『南嶋探験』をまとめた「高江洲二〇一四」。なお『琉球沖繩本島取調書』・『琉球八重山嶋取調書』は、法政大学沖繩文化研究所の沖繩研究資料二一～二四・二九として影印と翻刻が刊行されている。

さて『南嶋探験』によれば、儀助は一八九三（明治二六）年六月一日の午後三時に那覇港に到着して那覇西村の旅人宿に投宿し、同三日には首里城を訪れている。次の通りである（傍線部は渡辺による）。

旧王城ヲ一見ス。今ハ熊本鎮臺ヨリ沖繩分遣隊ノ營トナレリ。而シテ歩兵第一三聯隊第六中隊之二居ル。隊長ハ陸軍大尉世良田【弥】氏ナリ。

余、名刺ヲ通シ面會ヲ求ム。奮城ノ畧図一葉ヲ惠マル。且中尉近藤【政敏】氏ニ命シテ先導セシム（平時総人数百三十五人、戦時二ハ豫備三分ノ二ヲ加ヘ二百七十七人トナルト云フ）。城郭面積一万八千八百三十一坪二四七（当藏村地内也）。首里城ハ首里最高ノ処ニアリ。城中清泉湧出シ、頗ル形勝ノ要ヲ得タリ。……那覇ヲ距ル事五十町、山ヲ鏟シテ城トシ、礪石（……）ヲ置テ外郭トス。周圍九町、石垣ノ厚二間余、高二丈余、巍々タル石ノ唐門アリ。其結構、正殿ハ中央高所ニアリ、殿閣二層、南北八楹、其位置西ニ向フ。内部ノ梁柱上（リ）下（リ）ノ龍ヲ繪ク。総テ明制ニ擬ス。書院・燕室ハ我カ制ヲ用フ。城門十一個、内門額ニ守禮之邦ノ四字ヲ題ス。尤モ人目ヲ引ク。

熊本鎮台沖繩分遣隊とは、一八七五年五月に明治政府が「藩内保護ノ為」として沖繩（琉球藩）への設置を決定した陸軍支管で、一八七九（明治一二）年三月、内務省官吏の松田道之とともに沖繩に到着し、同月末に松田が沖繩県設置と首里城接収を断行した後、一八八〇年から九六年まで首里城を営所として使用した「原一九九二」。『南嶋探験』からは、その中隊隊長が儀助に「旧城ノ略図一葉」を提供したことが分かるが、図自体は収録されていない。一方、『琉球沖繩本島取調書』には「首里城ノ図」が綴じられており、『南嶋探験』との記載内容の一致（引用史料の傍線部）などから、分遣隊が提供した略図そのものであると考えられる「高江洲二〇一四」。

この「首里城ノ図」は、一九八〇年代に開始された首里城の復元事業のなかで参考図として用いられるなど、すでに広く知られた存在であるが、管見の限りではモノクロの複写版のみが流布し、また「首里城、熊本鎮台分遣隊配置図」といった簡便なキャプションが付されるのみで史料的な説明が殆ど

なされないままに利用されてきたようである。そこで以下では、彩色の原本画像を提示するとともに、熟覧調査で得られた知見に基づき、記載情報の補足や修正を行いたい。

「首里城ノ図」は、『琉球沖繩本島取調書』内に綴じられた和紙の袋【**図3-1a**】に、縦六折りの状態で収められている【**図3-1b**】。袋には「首里城ノ図」と墨書されている。図の大きさは縦二四・〇センチ（右）×二三・八センチ（左）×横四二・五センチで、朱罫の五ミリ方眼紙（裏白）が用いられている。同取調書の他の部分ではこの用紙は使用されていない。右に綴じ穴の跡や破れがあり、もとは用紙そのものが綴じられていたと考えられる。下辺の文字が僅かに切れていることなどから、いずれかの段階で本来の用紙がやや切断されたらしい。

一部に墨ないしは黒インク、赤インク、緑の色鉛筆が用いられており、それ以外は全て鉛筆書き／描きである。図の左端の「位置／西」、下部の「当蔵村ニアリ 首里城 周囲九丁 用地積一万八千八百卅一坪二合四夕七才／殿閣二層南北八楹結構総明制ニ擬ス／書院燕室ノ如キハ我制ヲ用フ門十一」【**図2**】（黒字）は同筆とみられ、その他の部分の筆跡と異なっているようだ。後から儀助ないしは他の人物が加筆したのであろうか。

なお明治政府の官吏として一八七〇年代に数次にわたって沖繩に出仕した伊地知貞馨が、一八七七（明治一〇）年に刊行した『沖繩志（琉球志）』には、首里城について次のような記事がある。

首里城。藩王ノ居城タリ。其地中頭ニ属ス。那覇ヲ距ル事五十町。山ヲ鏟シテ城トシ、蠣石ヲ置ミテ外郭トス。周圍九町、正殿ハ中央高所ニ在リ。殿閣二層、南北八楹、其位西ニ向フ。結構、總テ明制ニ擬ス。書院・燕室ノ如キハ我制ヲ用フ。門十一……。

この記事は「首里城ノ図」ならびに『南嶋探験』の記述と重なる部分が多く、「首里城ノ図」の加筆部分は『沖繩志（琉球志）』ないしはそれに類する既存の記述に依拠して作成された可能性が高い。

一方、分遣隊による本来の作図部分に関しては、次のような特徴が看取で

きる。

① 城壁が、墨ないしは黒インクで描かれている。  
② 木工家屋が、【**図5-1a**】のように線で囲まれた斜線部分として示されている。

③ 池（龍潭・円鑑池）が、波線で描かれている。

④ 諸樹林による耕地が、【**図5-1b**】のように示されている。

⑤ 等高線が記入されている。

⑥ 左上に矢印が記されている。北の方位を示すものと考えられる。

⑦ 首里城に関しては、十一の城門と「鐘楼」・「旧鐘楼」・「正午計」（日影台）のみが注記され【**図2**】（緑字）、その他の注記は概ね沖繩分遣隊の配置や状況を示すものである【**図2**】（青字）。

⑧ 周辺施設として「円覚寺」・「師範学校」（沖繩師範学校）が記され、また隣接する「当蔵村」・「崎山村」へと通じる道が示される【**図2**】（橙字）。ただし当蔵村は位置としては不正確である。

⑨ 軍隊符号にて、「歩兵中隊横隊」と「歩哨あるいは歩兵斥候」、およびその動線が示されている【**図5-1c**】（参照）。大半は緑の色鉛筆で描かれているが、一部、赤インクが用いられている。その区別が何を示すのかは分からないが、赤が夜間の歩哨（不寝番）の配置を示している可能性が考えられる【**図5-1d**】（参照）。

歩哨については、一八八八（明治二一）年の『琉球見聞雑記』に「此門（歓会門）ニハ熊本鎮台分遣隊ト云表札ヲ掲ケ番兵居リテ切二人ノ入ルコトヲ許サス」とあり、また時期は不明ながら、「熊本鎮台歩兵分遣隊」と記した看板を掲げた歓会門の前に立つ「番兵」の写真も現存している【**図6**】。

なお正殿前の中庭（御庭）に描かれた部隊符号には赤インクで「一〜四小隊」・「衛生部」と記されている【**図2**】（赤字）。日本陸軍では平時には小隊は存在せず、戦時編制になると中隊下に編成されていた内務班が小隊となつた「伊藤二〇一九」。詳細は不明だが、「首里城ノ図」には戦時を想定した部隊配置や動線が示されている可能性も考えられる。









図1 首里城ノ図



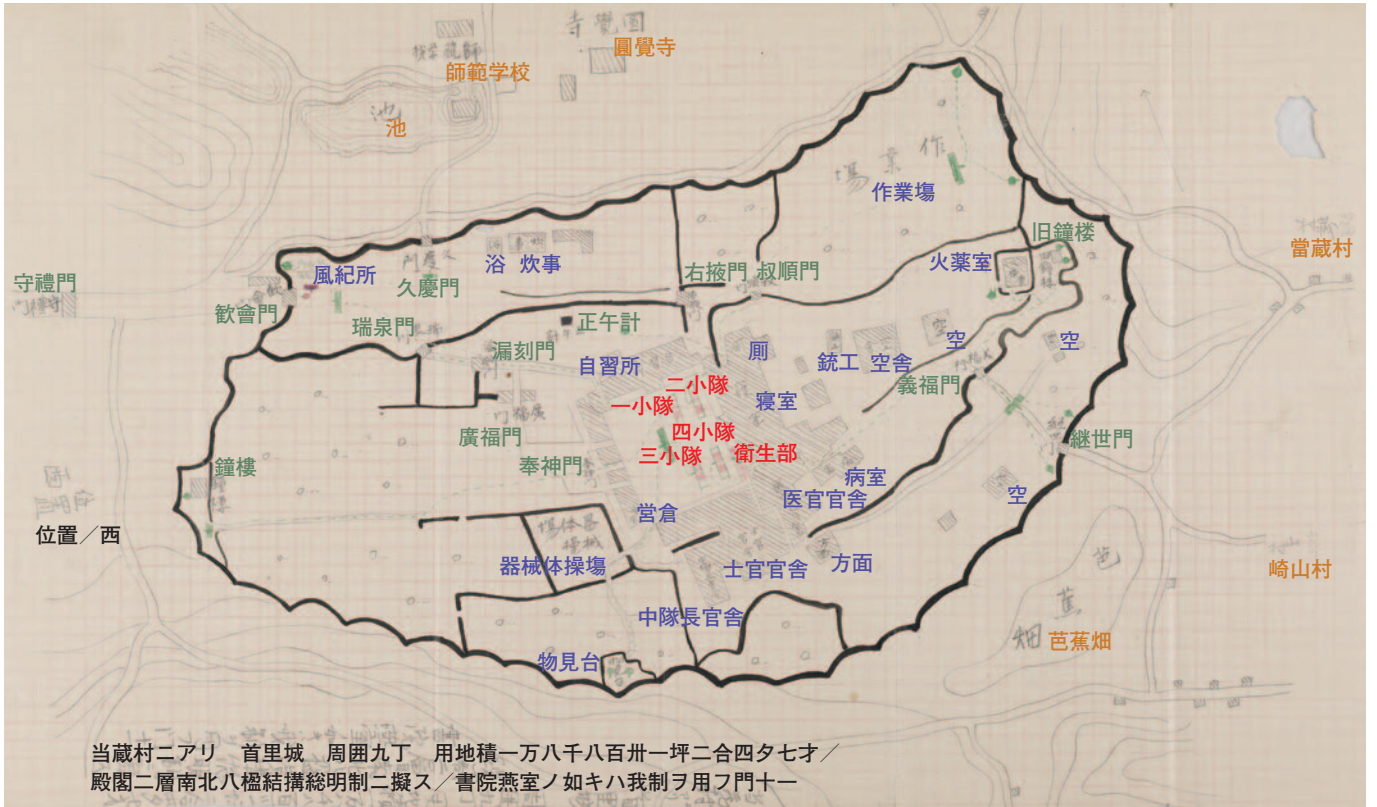


図2 首里城ノ図 (文字情報) 緑字：首里城に関する注記、青字：分遣隊に関する注記、橙字：周辺情報

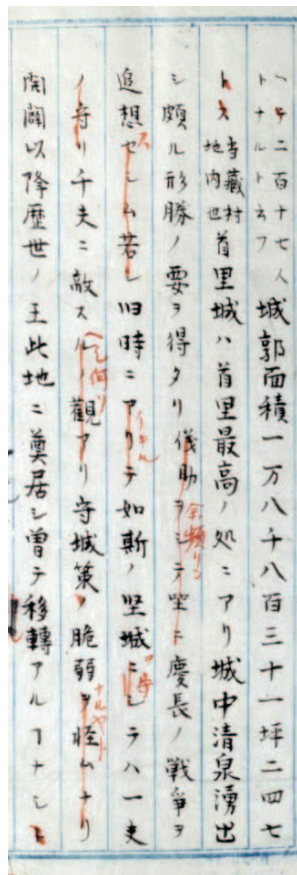


図4 『南嶋探験』自筆本乙第1号 (青森県立図書館蔵)

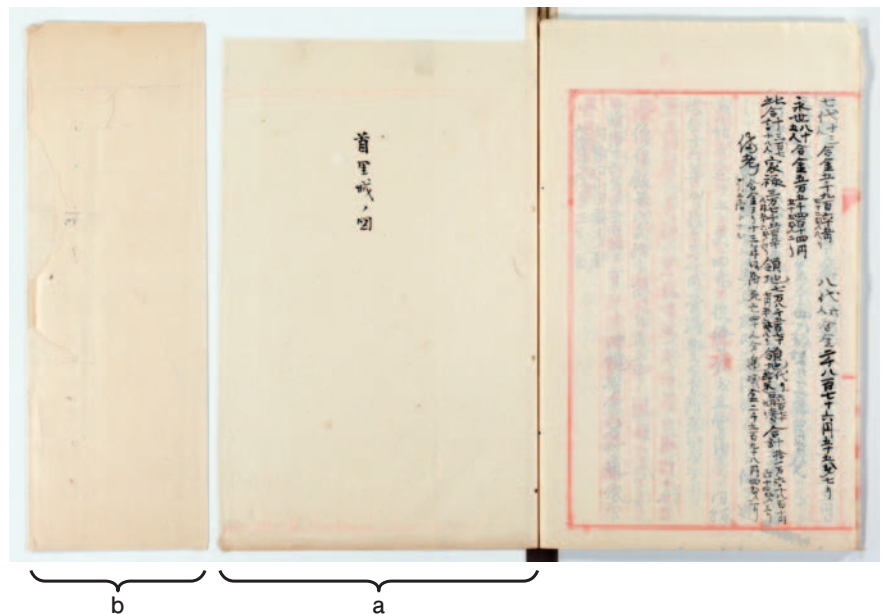


図3 首里城ノ図 (外装)

以上から、従来「分遣隊配置図」等と理解されてきた「首里城ノ図」は、沖縄分遣隊の営所内における配置状況に留まらず、何らかの条件下における部隊や歩哨の配備や動線をも記した、より軍事色の強い図であることが指摘できる。儀助が、「奮城ノ畧図一葉ヲ恵マル」と記しながらも『南嶋探験』にこの図を掲載しなかったのは、本図のこうした性質が関係しているのかもしれない。

【参考・引用文献】

- 伊藤 桂 二〇一九『兵隊たちの陸軍史』新潮社  
 沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部編 一九八七『首里城関係資料集』同建設部  
 笹森儀助（東喜望校注）一九八二『南嶋探験』一（東洋文庫四二一）、平凡社  
 笹森儀助（東喜望校注）一九八三『南嶋探験』二（東洋文庫四二八）、平凡社  
 高江洲昌哉 二〇一四『沖縄本島取調書解題―『南嶋探験』の比較から』法政大学沖縄文化研究所『沖縄研究資料二九 琉球沖縄本島取調書』同研究所  
 輝 広志 二〇〇七『琉球八重山嶋取調書 附録』について』法政大学沖縄文化研究所『沖縄研究資料二四 琉球八重山嶋取調書』同研究所  
 得能壽美 二〇一四『本資料の性格について』法政大学沖縄文化研究所『沖縄研究資料二九 琉球沖縄本島取調書』同研究所  
 原 剛 一九九二『明治初期の沖縄の兵備―琉球処分に伴う陸軍分遣隊の派遣―』『政治経済史学』三二七  
 『琉球政府編 一九六五『沖縄県史』一四（雑纂二）、国書刊行会

【謝辞】

本稿作成にあたっては、安里進・麻生伸一・片桐千亜紀・黒嶋敏・高良倉吉・松尾晋一・山本正昭の各氏のご教示・ご協力をいただいた。また神奈川大学日本常民文化研究所には、史料の熟覧や画像の提供において甚大なご高配を賜った。記して深謝申し上げます。

注

- (1) 同様の資料として常民研には他に少なくとも『沖縄県群島ノ内宮古之部』（祭魚洞一九〇七号）が所蔵されている。  
 (2) 『笹森（東）一九八二年』および青森県立図書館蔵『南嶋探験 一名琉球漫遊記 乙第一号』（同図書館デジタルアーカイブ）による。  
 (3) 「」はテキストの脱字部分、「」は内容の重要性に鑑みて見せ消しを復活させる。

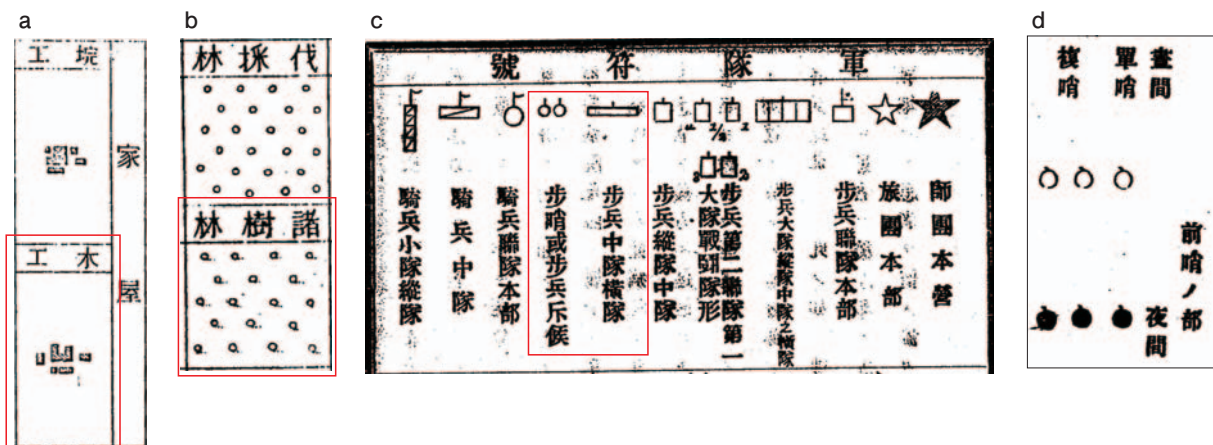


図5 測量記号 (a・b) と軍隊符号 (c・d)  
 a・b：河井源蔵編『改正 演習必携』(有則軒、1892年)、c：小川又次編『明治十九年四月参謀旅行記事 一般之部』(陸軍文庫、1886年)、d：『戦術捷徑』(歩兵第十六聯隊、1890年) (国会図書館デジタルコレクションより)



せた箇所である。

- (4) 例えば『首里城関係資料集』(沖縄開発庁一九八七)、二二九頁には、「首里城ノ  
図」の影印版が「首里城、熊本鎮台分遣隊配置図(沖縄県、「沖縄本島取調書」よ  
り)」というキャプションとともに掲載されている。
- (5) なお陸軍の罫紙としては、一八九三(明治二六)年五月から翌年五月までの沖  
縄分遣隊の予算書を記した「歩兵第拾三聯隊」の朱罫紙と、同年間の分遣隊の病  
室諸費を記した「第六師團」の朱罫紙が、それぞれ二丁ずつ綴じられている。
- (6) 儀助の自筆【図4】と近いように思われる。
- (7) 伊地知は参考文献の一つとして「琉藩取調書」を挙げており、これは一八七二  
(明治五)年に行われた明治政府の調査結果をまとめた『琉球藩諸取調書』(国立  
公文書館蔵)・『大蔵省調 琉球藩雜記』(国立公文書館蔵)を指すものと考えられ  
るが、この取調書には首里城に関わる同様の記述は見出せなかった。
- (8) この辺りは鳥小堀村で、当蔵村は首里城の北面に位置する。
- (9) 「琉球見聞雜記―明治廿一年沖繩旅行記事―」(琉球政府一九六五)、四八八頁。  
(東京大学大学院総合文化研究科/画像史料解析センター共同研究員)

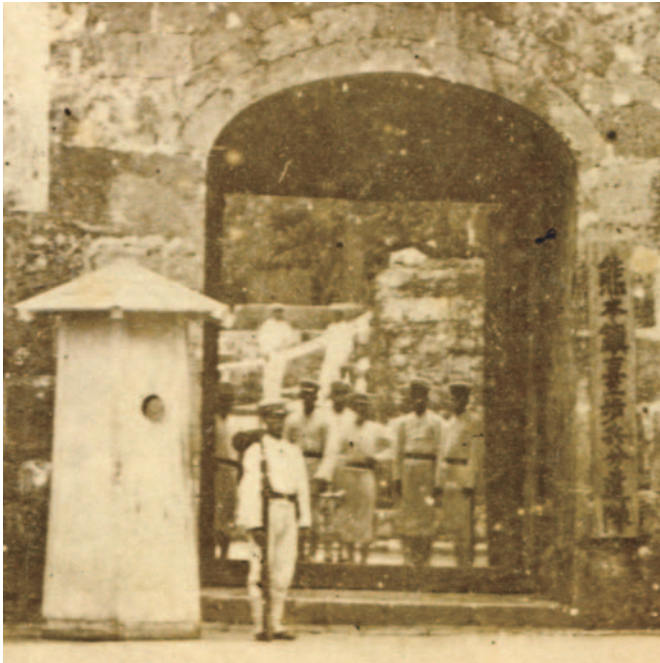


図6 欽会門前の歩哨

写真裏面に「琉球首里旧王城入口総門 当時歩兵營所」の墨書がある。(沖縄県立博物館・美術館蔵)